

死ねばいいのに

目次

一人目。
二人目。
三人目。
四人目。
五人目。
六人目。

.....
333	267	199	135	69	5

一人目。



「ブックデザイン」
坂野公一 (swelle design)
「カバイラスト」
山本タカト
「本文イラスト」
遠藤拓人

亜佐美が死んだのはショックだったな。

そう言ったのだった、私は。慥かケンだかケンジだかという名前の私にとってはどうでも好い其奴は、実に不愉快な態度で、何だかブカブカした毛だらけの襟のジャケットに半分のくらい貌を埋めたまま、

「ああん」

というような、人を小馬鹿にしたような大人をナメ切ったような、語尾の上がった声を発したのだ。

何だ此奴は——と思う。普通思うだろう。礼儀作法を弁えろとか目上を敬えとか古臭いことを言うつもりもない訳だけれど、当然いい気分はしないのである。というより明らかに感じが悪い。所謂ムカツクというやつだ。だからといってテメエムカツクのな発言をしたのでは、こちらも此奴と同じレヴェルになつてしまふ訳で、この場合は感情をぐつと肚に収め、その上で窘めるような戒めるような、そうした分別ある意思表示をするべきなのだろう。目上の者として、である。

だから訝しげな表情を作った。

反応はなかった。

仕方がないから、ショックだったよと私は反復した。他に言い様もない。私は問われたことに答えただけで、答えに対して返しがなければ繰り返すしかない。

「——それだけ？」

ケンジは、多分ケンジだったと思うのだが、いずれそういう名前の其奴は、そう返して来た。

即座に応酬が出来なかった。

これだけ訝しそうな表情を見せているというのに、ケンジは全く態度を改めない。姿勢さえも変えない。口調は前にも増して小馬鹿にしているように聞こえた。要するに私の意思表示はまるで効果がなかったということである。そもそもケンジは私の眼を、というか顔を、否、私の方をさえ見ていないのである。

外を覗いている。

「それだけ——って何だ」

思うに二十秒くらい間を空けて、私はそう言った。

やや高圧的な言い方になってしまったのだが、それは己むを得まい。

ケンジは漸く私の方に顔を向けた。

不服そうな顔付きだ。目付きが先ず反抗的だ。

何だその眼は。どやしつける。胸倉を攫む——そんな自分を私は想像する。

でも想像するだけだ。

そんなことはしない。

そんな大昔の教師のような態度を取る気はさらさらない。まるでない。

実際、自分が学生だったその昔、そうした言葉を吐く教師や吐かれる生徒は少なからず居た訳だけれど、効果はなかったと思う。より反抗的になるか、怯えて萎縮するか、無視するかだろう。そうした恫喝めいた言動で人は改心したり反省したりはしないものだ。精屈するだけだ。

今思えばそれは、ガン付けてるんじやねえぞというヤクザのセリフを真似た不良学生達の言葉と、同質で同義のものでしかなかった訳で。

私自身は、自慢する訳ではないが品行方正な性質で、幼い頃から体制に反抗するような行動を執ることも一切なかったし、不良と呼ばれる連中とも距離をおいて過ごしていたのだけれど、それでも親や教師のそうした高圧的な物言いに対しては強い抵抗があった。

長じたからといって、立場が上になったからといって、自分がそうした言葉を口にするのはどうなのかと、そう思ってしまったのである。

だから黙っていた。

ケンジは椅子に凭れ掛ったまま体勢を少し変えて、やけにくぐもった声でああと唸った。

襟に口許が埋まっている。

ああ、つて。

「おい、何なんだよ。そのリアクションはどう受け取ればいいんだ？」

「俺、態度悪いっすか」

ケンジはそう言った。

答えられなかった。

「そうだと言えはいいのだけれど。」

「そうなのだから。」

少なくとも初対面の、目上の人間と接するに相応しい態度ではないだろう。

でも拍子抜けしたというか、当てが外れたというか、戦意を喪失したというか——私は結局、より訝しそうな貌を作ることしか出来なかった。襟から顔を出して、どうなんすかとケンジは続ける。

「どうって」

「イヤ、何か不服そうだから」

「不服って——何だ」

私がそう言うのとケンジは少し口を尖らせ、一瞬間を置いてから、どうやら舌打ちをした。

顛顛の辺りが熱くなった。

テーブルを叩きたくなる衝動を抑える。

その苛苛を見透かすようにケンジは私の手許を見る。

「な——何だ」

「あの」

「何だよ」

「だから」

「だから何だ」

「さっきから何だ何だって」

質問してるのこっちなんすけど——とケンジは言った。

私の怒りは萎む。

慥かに、何だばかり言っている。

「いや、だから——不服そうと言われたってだ」

「ムカついた顔してンじゃん」
私は言葉を遮られた。

「何か怒ってるつつうか。正直こっちも気分悪いし。でも誘ったのこっちつつうか、俺仕切りのな感じだったから、マズかったかなと思つて。俺、あんまりちゃんと育つてねえから、口の利き方とか知らねえし。俺のこと気に入らねえから色々答えてくれねえのかなと思つて」

「答えてるじゃないか」

「そう。」

答える必要などないのに。

仕事帰りに、私はこの男に捕まった。

咄嗟にキャッチバーの呼び込みかと思つた。だが、それにしても様子が変わつた。

少し時間貰えないっすか、などと言う。そもそもこの近辺にその手の店はない。繁華街までは距離がある。あつて精神が定食屋だ。キャッチセールスにしては素人臭い。

ならば新興宗教か、はたまたマルチ商法の勧誘なのかと勘繰つてもみただけけれど、それも違うようだった。

何よりこの男は私の名前を知つていたので。挙動不審なイワシのような眼をあちこちに向け乍ら、それでいて決して私の顔を見ることなく、此奴は、あのうヤマザキさんですよねなどと云つたのだつた。

そう。私は山崎だ。

これで私が女だつたら此奴は確実にストーカーということになるのだからけれど、残念乍ら私は冴えない四十男である。ホモセクシャルのストーカーという発想は、この場合何だか馬鹿げて感じられたので却下された。

君は誰だと質した。何故私の名前を知つていと問うた。

先ずはそれしかないだろう。此奴はケンとかケンジとかいいう名前を言つた後、

アサミのことご存じの人ですよね——。

と言つたのだ。

亜佐美。

それは鹿島さんのことかと問うた。

アサミというのが鹿島亜佐美のことであるならば、それは慥かに私の知る女性である。

鹿島亜佐美は、私の会社で働いていた派遣社員だ。所属は私の部署だった。管理しているのは私だ。

ただ——亜佐美は三箇月前に亡くなつてゐる。事故か自殺か殺人か、警察がどういふ判断を下したのかは知らない。死亡時には刑事も来たし、事情聴取らしきこともされて、あれこれ話もしたのだけれど、それでどう決着がついたのかは聞いていない。別段報告もなかった。新聞やテレビで頻繁に報道されたような形跡はなかったし——いや、単に私が観ていなかっただけなのかもしれないのだが——まあ自殺なんだろうと、私は漠然と思つてゐた。

鹿島亜佐美さんのことかな——と、念を押した。

ケンジは、そうつすカシマアサミですと言つた。

それなら。

君は鹿島さんの家族の人、と尋いた。

家族じゃないすけどとケンジは答えた。

まあ知り合い、かな——。

そうか知り合いか。

つまり恋人か何かなのだろうと、私は勝手に判断した。そうでないかもしれないが、どうでもよかつた。

アサミのこと——。

少しだけ話聞かして欲しいんすけどとケンジは言った。

改めて話すことなどないと答えたなら、そつちに話すことがなくてもこつちに尋きたいことはあるんだと言う。私は何も知らないよと主張したのだが、俺よりは知ってるでしょうとケンジは返した。

死ぬ前の日まで働いてたんすよね――。

あんたの前で――。

それは事実だ。

だからといって。どうだと言うのだ。

俺――。

アサミのことあんま知らないんすよとケンジは言った。

付き合い出して間もなく死んでしまったとか、そういうことなのだろうか、私は再び勝手に判断した。

どうでも良かったのだが。

だから敢えて質問はしなかった。そつちはどうか知らないが、こちらはお前なんか全く興味がないのだと、そう知らしめなくてはなるまい。そう考えたのだ。

何度も言うが――。

私だつて知らないよと素っ気なく言った。

私は彼女の上司だった訳ではない。正確には彼女の派遣先に勤務している一社員に過ぎないのだ。況んや家族でも親戚でも友人でもない。

その程度の関係である私から何を聞き出そうというのか。聞いてどうする。彼女の職場での働き振りでも知りたいというのだろうか。そんなこと今更知つてどうなるというのだ。彼女は死んでしまったのだ。悼む気持ちは解らないでもないけれど、こつちはそれどころではないのだ。

本当にそれどころではない。

たった三箇月しか通わなかった派遣社員の想い出に浸っている暇などない。頭の悪そうな若者の感傷に付き合っている余裕もない。忙しい。とても忙しい。だからそんな未練がましいことを。

未練――。

その時、幾つかの視線を感じた。別に疾しいところなど何もなかったのだが、何だか人目が気になった。往来でこんな奴と立ち話をしていること自体が嫌だった。

じゃあと言つて振り切ろうとすると手を攫まれた。何だねと少し声を荒らげて、私は余計に人目を気にした。

私は男を睨み付け、職場での泣けるエピソードでも語ればいいのかと乱暴に言つて、腕を振り払おうとした。

それでいいすよ――。

何でもいいすよ――と。

ケンジは言った。

筋向かいの通行人が視ている。背後から来る者にも私達の姿は見えている。

本当に、私は視線を浴びていた。
道道話すのは嫌だった。

それに、外は寒い。私は結局、駅までの経路の途中にあるファミリーストランに見知らぬ若者と入る羽目になった。

だから私は最初から不愉快だったのだ。不機嫌な態度になったって仕方がないのだ。多忙な時間を割いているのだし。

いや。

それはそうなのだが、先ず、此奴がどうやって私の名を知ったのかを確かめる必要がある——と私が思ったことは間違いない。亜佐美がうちの会社に派遣されていたことまでは簡単に判るにしても、私の名前と、そして顔を知るとは部外者には中中出来ないことである。うちの会社に辿り着いたとして、社内の者に聞かなければ私のことは判るまい。

誰に聞いた。

それは、私にとって重大なことである。

場合に依つては業務に支障を来す。それでもなくとも——。

——やっつけられない。

そう、やっつけられない。だから道草を喰いたい気分だったことも事実だ。会社帰りの私は元より憂鬱だったのだ。真つ直ぐ家に帰りたくない私は思っていた。どこかに寄りたいた時間を潰したいと思つて歩いてきた。職場から駅までの間に盛り場はない。一杯引つ掛けるつもりなら、別の町に移動しなければならぬ。

誘う相手はいない。

一人で行くのも億劫だ。

それでも、このまま帰宅したくないという気持ちは、その時私の中に強くあつたのだ。

否、今もあるのだ。私は帰りたくない。

終電まではかなり間があるし、暇潰しにこの若造の相手をするのもいいかなくらいのこととは思つたのである。

だからといってそんな事情を気取られるのは嫌だった。

初対面の、しかもチンピラのような若造に弱みを見せるような真似は出来ない。あくまで私は、乞われて嫌嫌付き合つてやる体でなくてはならないだろう。

そうした理由から、私の表情は五割り増し程度硬くなつていた筈だ。この状況でニコニコ愛想良くしている者はいないだろう。いたら狂人だ。

ファミレスなのだから酒はない。ビールぐらい置いていても良さそうなものだが——いや、メニューを繰ればあるのかもしれないなかつたのだが、縦んば置いてあつたとしても身体が冷えているのでビールの気分ではなかつた。

仕方がないのでホットコーヒーを注文した。

ケンジはウエイトレスに向けドリンクバーと言つた。そんなもの、単体で頼めるものなのか。それは何かに付属しているサービスマンじゃないのか。それだけでお代わりし続けて居座られたのでは商売上がったりじゃないのか。

私が無知なだけなのか。

上着も脱がぬまま水をがぶがぶ飲み干して、無言で席を立ち何だか判らない緑色のソーダ水のようなものを汲んで来ると、ケンジは反つくり返つてソファに沈み、

アサミ、死にましたよね——。

と言つたのだつた。

そこに、コーヒーが運ばれて来た。

こうした店のタイミングというのは常に極めて悪いものなのだ。私は会話の劈頭をホットコーヒーでございませうという脳天から出るような声に遮られ、仕切り直そうとする端緒をごゆつくりどうぞという舌足らずで心ないセールストークに押し折られてしまった。

間の悪い空気が流れた。

仕方なく煮詰まつたようなコーヒーを一口啜つて、私は言つたのだ。

亜佐美が死んだのはショックだったな——と。

「質問には答えているじゃないか。君は、死にましたよねと言つた。言つただろう？ だから私はショックだったよと返した。普通だよ。自然な流れだろう。そこから会話が始まるのじゃないか。それなのに何だよ。流れを切るような態度を執つたのはそっちの方じゃないか」

「ショックすか」

ケンジはそう言つた。

「ショックだよ。僅かな付き合ひとはいえ、顔見知りか亡くなつたんだからショックだよ。いけないか？」

何でそう喧嘩腰なんすかと若者は言う。

それはそつちの態度が悪いからだろうと私は言う。

「だから謝つてるじゃないすか」

「謝つてる態度じゃないだろう」

「悪いんすけど」

ケンジは前屈みになった。

私は引いた。

「俺、別に悪気ねえし、でもこういう人なんすよ自分。あんたのこと責めてる訳じゃねえすよ。ただ話聞きたいって言つただけすから。そんなイヤならいいすよ」

「いや、だから私は」

「知らねえって言うけど全然知らねえ訳じゃねえだろうと思うし、俺の方は何でもいいから話してくれって言つた訳だし。此処誘つたのあんたの方だし。わざわざ店入るなら何か喋ってくれんのかなって普通は思うじゃね？ そしたらムカついた顔してショックで終わり——ってどうなんすか。アサミ死んだんすよね。だからそんだけって言つたんすよ」

ケンジはストローに口をつけて緑色の液体を吸つた。

「じゃあ何だ。もつとその、御愁傷様とかお悔やみ申し上げますとか、そういうことを言えば良かったのか」

「言えば良かったって——」

何だか。

此奴は呆おろれている。

このどうでも好い男は私に呆おろれている。

言えば良いいとか言うかなあとケンジは呟つぶやいた。

「悪いんですけど、俺、頭悪いし、よく解とんねーんだけど、そういうのが大人のフツの態度なんすか？ あんたらそんな風に口利くちいてて喧嘩けんかにならないんすか？」

「喧嘩けんかって、君」

「俺らなら絶対ぜっ殴り合いになるから。ザけん的な。ってか、別に自分の彼女とかじゃなくとも、人死ひとんでてそういう感じの態度たいどって冷ひやてえつうか」

「いや——」

それは、そうなんだろう。

亜佐美は実際に死しんでいるのだ。私の気分やらこの奇妙な状況やらはさて置いて、私の物言ものごといは人の生き死いきにを語るに相あ応こたしい口調くちやうではなかつたかもしれない。

——こんな奴やつに。

論ろんされるというのは、どうなのか。だが、まあ私にも幾分の非ひはあつただろう。詫わびるべきは詫わびた方がいいと、私は思った。

そして、不味まずいコーヒーを口に含くんだ。

ただ苦くい。煮詰なまつている。温度ぬりも高い。淹ひれたたの熱あつさではない。保温ほんに保温ほんを重ねた点たて置きおきに違ちがいがない。香かりが飛とんで、コクも薄うすれて、ただ苦くくて熱あついだけの黒くろい液体りき体たいになり果はてている。

「言い方が悪わるかつたなら——謝まるよ」

私はそう言った。だが、どうして私が謝まらなければいけないのか。こんな初対面しよたいめんのチンピラに頭あたまを下くだげている自分おのれはいつたい何者なにものなんだ。何だなにって遣やること為なすことこうなるのだ。私は。

何も悪いことはしていないのに。そう思うと——。

「いや、謝まると言うかさ。君、君が何者なにものなのかこつちは知らない訳わけだよ。ま、鹿島君のことは知しっているけれど、君のことは知らないんだし、出合あい頭がしらに話わしろとか死しんでどうだとか尋たずねられてもさ、何と答こたえればいいか解と解とらないだろうよ。君達の間まではどうか知らないけど、大人おとなにはね、段取だんりというものがああるんだよ。色色いろ話わすとしたって、互たいに打ち解とけるまでのプロセスぷろセスというのがあるだろ」

ケンジはまた舌打したちをした。

「だ、だからその態度たいどが」

態度たいどは悪いんだよ俺おれはとケンジは挑いどみ掛かるように言う。

「だからこつちも断ことわりてるんすよ。悪いって。敬語けいごとか知らねえし。他にどう尋たずねばいいんすか。それこそ、部長ぶ長ちやうさんは偉いいんでしようとか賢さとしいんでしようとか言えば良よかつたのかよ？」

「何なにだよ——」

また何なにだよと言ってしまった。

慥たしかにこれでは芸げいがない。

「偉くないよ。賢くもないよ。あのな、私のこと知ってるのか知らないのかよく判らないけどね、私の会社は小さいんだよ。部長だったって部下は三人。課がないから課長は居ない。後は派遣。その派遣ももう全員カットしちゃったからね。鹿島さんは生きていたってもう通ってなかったんだよ」

「部長って偉くないんすか」

「偉いとか偉くないとか、そういう基準じゃないから世の中は。要は管理職だというだけだ。しかも中間管理職だよ。江戸時代じゃないんだからさ。役職は身分じゃないんだよ」

ふうん、とケンジは感心したのだから小馬鹿にしたのだから判らない反応をした。

君はどうなんだと問うた。

「身許を明かしてくれよ。君は彼女の何なんだ？」

知り合いつすよとケンジは答えた。

「それに身許つても、別がないんすよ身許。肩書きねえつうか。俺、仕事してねーし。してねえつうか、出来ねえつうか、コンビニとかでバイトしても解雇になるつうか」

「じゃあどうやって喰ってるんだ」

「それはその都度つうか」

「学生か？」

大学生くらいに見えないこともない。

学校キライなんすよとケンジは言った。

「勉強出来ねえから。大学受けたけど行かなかったし」

「落ちたのか？」

知らないつすよとケンジは答える。

「発表とか見てねえし」

「なら何で受けたんだ」

「就職したくなかったつうか」

私は溜め息を吐いた。

ニートの定義など私はよく知らないから何とも言えないのだが、いずれそうした類いな
のだろう。働かず、学ばず、ただ暮らしているのだ。

——そんな男に。

私は頭を下げたのか。

「言いたくはないが、随分不真面目な生き方だな」

そう言うと、そんなことないすよとケンジは言った。

「別にフザケてねえから。一応、真面目に頭使つて、考えて決めたんすよ。俺みたいなのが大学行って、それで別に頭良くなる訳でもねえのに通つて、ろくでもねえことして、それで退学したりするぐらいなら、他の立派な奴とかに席譲つた方がいいかな的な」

なら受験するなよと言ったら最後まで悩んだんすよと言われた。

「賢くねえとそんなサクサク行き先なんか決められないと思うんすけど。俺、馬鹿だから決められなかったから。で、やりてーこともねえのに働くつたつて——」

「やりたいことがやれる奴の方が少ないだろう。あのな、仕事なんてものはだな」

そんなこと今関係ないじゃないかと私は胸の端で思う。
違ーよ、とケンジは言った。

「何が違うんだ。みんな、苦勞して我慢してだな」

「やりてーことがやれねえんじゃないやなくて」

別にないんすよやりてーこと、とケンジは言った。

「好きなこととかねえし。有名になりてえとか金欲しいとか思わねえし。人と比べてどうか、そういうのもねえし」

夢とかないのかと、私は心にもないことを尋いた。夢なんかみられないすよとケンジは答えた。

「高卒だとあんまり雇って貰えねえし、選択肢なんかねえつつうか。無理に就職してダメで、そんで人に迷惑かけたりしたくもねえし、金貯めても遣い道ねえから、ならバイトで喰えるかなって」

まあ、そういうものなのかもしれない。私だって夢なんかない。あつたところで今更どうにも出来ない。選択肢はこのチンピラよりずっと少ない。先の見通しは——更に悪い。

「あの」

ケンジは相変わらず不愉快な態度である。

「もしか、そういう学歴とか肩書きとかねえと、会話つてして貰えないもんなんすか。何にもねえと信用もねえってことなんすか。なら、部長でも次長でも何でもついでる方が、やつぱ偉いってことつすよね？」

「いや——」

何だかうんざりした。

「まあ——いいよ。どうでも」

どうでも好い。

本当に、どうでも好い。

「とにかく私は偉くない。賢くもない」

寧ろ、馬鹿だ。そう思う。

部下は完全に私を馬鹿にしている。そうとしか思えない。そもそも連中は、会社を馬鹿にしている。慥かに、私の勤めている会社は所謂中小企業——しかも小の方である。従業員数も少ないし、将来性も皆無だ。

だからといって——。

連中は大きく働かないくせに給料が安い業績が上がらない発展性がない環境が悪い仕事
がキツイと、いつだって愚痴を垂れている。注意するとむくれて、叱ると辞める。でも辞
められて困るのはこつちだ。

どういふ訳か立場は連中の方が強いのだ。新人が辞めれば皺寄せはすべて私の処に来
る。任せていた雑務は全部管理職である私の処に回って来る訳だし、のみならず上の方か
らは管理能力を問われることになる。そうした状況を連中はよく知っている。だから連中
は完全に会社をナメている。そして、そんないつ倒産するか判らない弱小企業にしがみ付
いている私のことも、ついでに馬鹿にしているのだ。

後始末をするのはいつも私だ。

私だっと思ってている。弊社には先がない。業種的にも尻窄みだし、加えて上層部に経営センスがまるでない。倒産しないでキープ出来ているのが奇跡的だ。こうなると、何とかしようという気にもならない。

オーナー社長が資産家で、その資産を切り売りするようにして生き継いでいるだけの三流会社なのだ。それなのに役員連中は無駄に高給取りである。創業以来奉職しているところあることに言う常務は、ゴルフしかしなくせに私の数十倍の給料を貰っている。本当に何もしいない。文句だけは言うけれど。

部長以下は薄給だ。しかしヒラは残業手当が付くが、役付きは一切付かない。私は常にサービス残業だ。でも私がやらなければどうにもならない。部下達は、手当ては要らないから早く帰ると言うだけである。

やっつけられない。

部下も此奴と同じだ。

別に金なんか欲しくないとか言う。

金がなくなつてどうやって喰うのだ。

別に喰えますと言う。親も居るし貯金もあるし別にそんなに遣いませんしと言う。銀座で飲んだり、接待のためにゴルフ行ったり、そんな頭悪いことに金遣いませんから――。

そうだよそれは頭ワルイことなんだよ解つてるよ解つてやっつてるんだよ。

私は――。

そうはいかない。お前達のようにには振る舞えない。やっつけられなくたってやらなくちゃならない。

家族が居る。

家族が居るから、生活費だけでも稼がねばならない。いいや生活費だけではダメなのだ。全然ダメなのだ。家庭という機関を維持して行くには必要以上に経費が掛る。最低限では足りないのだ。まるで足りないのだ。

夫という場所や父親という場所を買う金は、安くはないのである。いいや、上限はないのだ。

だからやっつているんじゃないか。

イヤイヤやっつてるんじゃないか。

我慢して我慢して働いているんじゃないか。

連中は、残業手当は要らないと言うくせに、給料の方は安いとほざく。自分に対する評価が不当だと吐かす。じゃあ何なんだ、私に対する評価は正当だというのか。

給与明細を見る。就業時間は桁違いに多いのに、金額はお前達とそんなに変わらないんだ。情けない。でもそんなことを言うと、余計に見下されるだけなんだ。

私は視線を手許のコーヒーマップに注いだ。

黒い液体の表面を眺め乍ら、私はつい溜め息を漏らしてしまった。溜め息のつもりが、それは嗚咽のような声になつてしまつていた。

なんすか、とケンジが問うた。

「彼女はね——まあ、好い子だったよ。いや、まあ、こんな風に言うのはいかんことなのだろうが」

「何が？」

「女子社員を女の子、とか言うのはいかんのだよ。セクハラなんだよ。子供じゃないと言うのさ。社会人としての一個の人格を認めてないとか言うんだよ。言われたんだよ」

「アサミにですか？」

「亜佐美——鹿島君はそんなことは言わなかった。それに彼女はね、コーヒー淹れてくれたんだよ。私に」

「はあ？」

ケンジは眼を円くした。やっと人らしい反応をした。

「ンなもん、俺だつて淹れますけど。淹れてくれと言われれば誰だつて淹れるつしよ」

淹れねえよと、私はわざと下卑た口調で返した。

「淹れねーんだ」

「あのな、まあお茶汲みみたいな仕事するために就職したのじゃないと——普通大抵そう言われるんだよ。強要すればパワハラだよ。まあそりやそうさ。当たり前のことだ」

「でも——お茶くらい誰だつて汲めるつしよ。ンなもん仕事のうちに入らないんじゃないかね？」

「入らないからしないんだよ」

「誰も？」

「誰もだよ。自分で飲む分は自分で汲めが基本だよ。でも、それもまあ不経済だろ。保温しておけばコーヒーは煮詰まってしまうし、お茶なんか一杯ずつ淹れないだろ。だから」

私が——。

私が淹れているのだ。

部長の私が、お茶を淹れて配っているのだ。

「まあね、女性社員にお茶汲みを強要するのは間違っていると私は思うよ。そうしたことに男女の差はないさ。だから当番でも決めれば良かったんだが——生憎誰もお茶の時間に社内にいる訳じゃない。外出だつてするし、打ち合わせだつてあるだろう。だから」

フレキシブルに対応しようと言った。

自分の分を淹れるんだつたら他の人の分も淹れてあげればいいだろうと私は言ったのだ。そんなの大した手間ではないだろう。いや、全然手間じゃない。効率を考えればそれが一番好い。

その結果——なのである。そう言った途端、誰もお茶を淹れなくなった。淹れてくれとも言えなくなった。結局、私は部下の分もお茶を淹れることになった。

部長——。

お茶汲みみたいな真似してプライドが傷付きませんか？

そう言われた。

ぶん殴つてやりたかった。

でも、殴る前にそう言った奴は辞めた。

挨拶をしない男だった。私はいいから、せめて役員くらいにはきちんと挨拶しろと注意したら、そんな軍人みたいな真似は出来ない、そんな瑣末なことを強要するのは不当と言われた。そんなじゃ出世は出来ないぞ、そんな奴に責任ある仕事は任せられないからと言ったらば——。

パウハラだと言われた。

怒鳴ったら、来なくなつた。

パワーハラスメントがあつたというような抗議の手紙が上に届いて、私は訓告の上に減俸になつた。それからもずっと私はお茶汲みをしている訳で、常務などは笑い乍ら偉いねえ鑑だねえお茶汲み部長——と、私を揶揄する。

亜佐美は。

「何も言わないのにお茶淹れてくれたし、コーヒーも出してくれた。いや、だから何だつてことはないんだが。まあ」

嬉しかった。

だからと言つて、気が利くねえという一言も言えないのだ私は。そうした行為を褒めるのは、他の連中は気が利かないと暗に示しているようなものだからだ。

それに——。

「派遣の職務内容にお茶汲みは入っていないから。本来はいけないんだよ。まあ強要した訳じゃないから——」
くだらねえとケンジは言つた。

「ンなもん、社長が淹れたつて派遣が淹れたつていいじゃないかと思つて思うけど」

「そうだよ」

「そうだよそうなんだよそうんだけどくだらなくても」

「くだらなくても仕方がないじゃないか。どんなにくだらなくたって、世の中そうなんだから」

私は——。

大声を出した。

「何怒つてンすか。また態度悪いつて話すか」

「そうじゃない。そうじゃないけどな」

「しょうがないじゃないか」

「ありがどうも言えねえ訳、とケンジは問う」

「ありがどうくらは言つたさ。人間だもの」

「嬉しかったからね」

「ふうん」

「だから、彼女が通つてた三箇月間だけ、私はお茶汲み部長じゃなかつたんだよ」

「だから——死んでシヨックすか」

「おい。それこそそんな言い方はないだろう」

「ないつすけど。いまの、煽りのつもりつす」

「煽りつて——」

仕事大変なんすかとケンジは矛先を逸らす。

「大変だよ仕事はいつだって」

「そうなんでしょうけど。何か焦ってるつか。ヤバ気な感じつつつか。よく解んないっすけど」

経営状態は非常に悪い。

ただ、上はどうしても自分達の非を認めようとはしない。

すべて現場の処理能力が低いからだと考えている。それならそれでいい。いいけれど。責任負ッ被せるなら任せて欲しいと思う。

マジメなんじゃないんすかヤマザキさんって——とケンジは言った。

「真面目？ まあ、真面目なんだろうよ。真面目にしてなくちゃ生きて行けないから」

「じゃあいいんじゃないすか。俺なんかと違って」

「いい——かよ」

成功すれば上司の功績。失敗すれば私の所為。

下のしくじりの尻拭いは何もかも私がする。それなのに上手く行った場合は、評価しないと不当な扱いだと言われる。私が手取り足取り指図しなければ何も出来ないくせに。いや、いちいち指示しなければゴミひとつ捨てないくせに。

「指示しないと本当に何もしないんだよ。部下は。書類コピーしろと指示すれば、まあコピーは取る。取るが取りつ放しで持つて来もしない。分けたり綴じたりしないだけでなくトレイに置きつ放しなんだぞ。それ——普通か」

さあ、とケンジは肩を竦めた。

「でもコピーして分けて綴じて持つて来いって言えばそうするんじゃないんすか？」

「まあ、そう言えば——するだろうが。それは言うまでもないこと——じゃないか？」

さあ、とケンジはもう一度肩を竦めた。無表情な顔が半分襟に潜った。

「言つてやるんなら言やいいじゃないすか」

「そう——だが」

「馬鹿は言つてもしねーし。何か言つて、俺に指図すんとかつて殴られるよりイイと思っうけど」

「そんなのは論外だよ。そんな奴は就職出来ない」

わりかし多いつすよとケンジは言った。

「君もそうなのか」

「俺は殴らないすよ。手痛えし。つか、殴る程相手に興味ねえつか」

まあ、そうなのだろう。

——此奴は。

出合った時の印象程、悪い人間ではない——のかもしれないと私は思い始めている。勿論印象が良くなつたという訳ではない。慣れただけなのか。

「まあ、君なんかには解らないかもしれないがね、色色と辛いんだよ」

「ツライんすか」

ああ。辛い。辛くて辛くて堪らない。だから。

亜佐美の、ごく普通の——私が普通と思える——対応は嬉しかった。

本来喜ぶようなことではない。当たり前のことなのだろうと思うのだが、それでも亜佐美が通っていた三箇月間、私は——。

「鹿島君はね、まあ仕事の何たるかを知っていた。何のためにするのかということを理解してた」

「意味解ンねえ」

「だからさ。さっきの話だよ。私はね、慥かに書類をコピーしろと指示した。指示された奴はコピーするよ。でもな、コピー自体は作業であって仕事じゃないんだよ。ミーティングに使うために人数分資料が必要だからコピーが必要だという話なのであって、それ自体は何の意味もないんだよ」

「無意味っすか」

「無意味じゃあない。でも、紙を台の上に置いてフタ閉めてボタン押すなんてことは、まあ猿だって出来ることじゃないか。そんなことして貰うために採用する訳じゃないだろ」

ケンジは無反応だった。

「じゃあ猿にやらせろとか言うのか」

「そうじゃねえけど。まあ、俺なんか猿並つすよ」

「参加する人数分の資料を調べて、それで会議が恙なく行えて——それでこそ意味がある訳じゃないか。いいや、もつと言うなら、会議だって仕事じゃないんだよ」

「仕事じゃねーの？」

「仕事の準備だよ。会議自体は何も生み出さない。会議は仕事をきちんとやるためにするんであって、会議そのものは仕事じゃないだろ。社員が顔付き合わせて話してたつて一文も貰えないだろ。中には会議こそ仕事だと勘違いしてる馬鹿も居るけど、そういう奴は会社ごっこがしたいだけの馬鹿だよ。あんなものしないで済むならしない方がいい。時間の無駄だ」

「無駄なんだ」

「無駄さ。結論が出てるようなことをぐじぐじ蒸し返して悔やんだり威張ったりされるだけの会議は糞だ」

亜佐美は、ちゃんと私の意図を汲んでくれた。

事務処理を淡淡とこなすだけでなく、有益な意見も述べてくれた。派遣の職務以上の功績があったことは紛れもない事実だろう。だから、そう言った。

だが、ケンジはクソとか言うんだと。どうでも好いところに反応した。

「糞は糞だよ」

「まあそうでしょうけど」

「いざれば彼女は仕事が出来た方だった——と私は思うよ。それより君、どうやって私のことを知った？」

「はあ？」

「はあじゃないだろ。君は私の顔と名前を知っていた訳だろう。どうして私が彼女の上司だった山崎だと判ったんだ」

「ヤマザキさんじゃないんすか？」

「いや山崎だよ。だから」

誰かに会って尋ねたのか。

私のことを馬鹿にしている部下に聞いたのか。

私のことを見下している、上司に聞いたのか。

いずれ私を知る誰かと接触しているのだ。このケンジとかいう男は。そうでなくては私の情報を得ることは出来まい。

それは、嫌だった。

こんな男が――。

働きもせず、敬語も使えないチンピラが――。

――誰と会った。

私は会社の連中の容貌を思い浮かべる。部下を同僚を上司を、その顔と声を一人ひとり思い浮かべる。一人ひとりの。

嫌な想い出が浮かぶ。

何よりも――。

「君は、誰に何と言った？」

「何って？」

「いや、あ――鹿島君のことだよ。君、まさか変な誤解を招くような言い方をしてないだろうな。おい」

怖えなあと言いなら、ケンジは再びのけ反った。

「何すか。何かマズいんすか」

「ま――まずいよ。そんな、派遣社員と個人的な付き合いがあったとか思われちゃ、宜しくないに決まっているじゃないか。それでなくたって私は――」

嫌われている。

蔑まれてる。

疎まれてる。

「し、しかも相手は死んでいるんだ」

「死んでるならイイんじゃないすか」

「どういう意味だと私はきつく言う。」

「どういう意味って――心配ないすよ。自宅には行ってませんから、奥さんとはなんも話してねえし」

「それは」

ほんとうに。

どういう意味なんだ？

「じ、自宅って――何故君が私の自宅の住所を知っているんだ。会社の誰かが教えたのか？ い、いいか、鹿島君は私とだけ付き合いがあった訳じゃないんだぞ。うちの部署の連中は、全員彼女と仕事をしていたんだ。みんな知っている。私の上司だって人事部だっけ知っている。何故私だ。会社の誰かが君に何か言ったのか？ 何か、私を」

バレている。

のか？

顛顛が脈打った。

「だ、誰だ。私を指定したのは誰だ？ 君は何だつて私をピンポイントで捕まえたんだよ。おい。答えなさい。鹿島君と私が親しかつたとも言われたのか？ も、もしや」

いいや。

まさか。

「誰だと尋いている」

「アサミつすよ」

ケンジはそう言った。

「ふ、ふざけるな。ふざけるなよ。彼女は」

死んだんじゃないか。

私はコーヒーカップに手を伸ばす。かちやかちやと陶器がぶつかる音がした。少し。

震えている。

一口含む。

もう——冷めている。益々苦い。不味い。

落ち着け。落ち着くんのだ。

「ケンジ——君だつて」

「はあ」

「あのね、君のような生活をしている人には解らないだろうけれども、一般的にはね、いや、一般的というか、まあこういう、その、社会ではだな」

何を言っているのだろう。

私は亜佐美を思い出している。そんな場合じゃない。

「とにかく、悪い噂というのね、命取りになったりもするんだよ。彼女と私に何かあったと、どこかで誰かが勘繰っているのか、或いは——私を陥れようとしているのか、そうだな。私の社会的地位を奪おうとしている誰かがだな」

「はあ？」

「か、会社のポジションだけの問題じゃないんだよ。生活がだな、人生がダメになる可能性だつてあるんだ」

可能性じゃない。

もうダメなんじゃないのか。

「か、家庭まで壊れてしまったらどうする。出世だとか昇給だとかそういう問題じゃないんだよ。もっと、デリケートな問題だ。だから君にそんなデタラメを吹き込んだ奴は」

「だから」

ケンジは眉間に皺を寄せた。

「アサミ本人ですから」

「いい加減にしろッ」

「それ、こつちのセリフつすよ。あんた」

アサミと寝たンじゃん。
と——。

眼の前の、社会から落伍したような、地位も肩書きもない私にとってどうでも好い若者は言った。

「な——何を」

「いや、あんたケータイにメールしてんじゃん。何度も」

「そんなことはない。し、仕事のメールだ」

「仕事のメールつて、派遣のケータイに送ったりなんかしなくね？ それに全部消せつてアサミに指示したんでしょ？」

「い、いや」

すつと——。

額が冷たくなつた。

血の気が——引いたのだ。

「まあ、指示すりゃ指示以上のことするつてさっきあんたも言つてたけど、ちゃんと消してたから。別にバレてないつすよ。でも——アサミ、やっぱ指示した以上のことしてんだわ。メール、パソに転送して保存してたから」

「何だつて？」

それじゃあ。

だから心配ないつてとケンジは言つた。

「警察もさ、見てないから。なーんかヤバいかなと思つたから俺が消しといた。まあ、潜ればサルベージ出来ンのかもしんないけど、警察もそこまでやらないつて。あんたアリバイあるみたいだし、少なくとも犯人だとは思われてないから」

「オイ待て。アリバイつて何だ？ 犯人つて——」

「アサミ殺した犯人」

殺人事件——なのか？

「犯人でもねえのに色色尋かれるのめんどくせーだろうなと思つて、俺にしてみれば気イ利かせたつもりだったただけ。迷惑だったなら謝るけどもさ」

「いや——それは」

「五回も寝たンでしょ。死ぬまでに。もつとか」

「お、おい君——」

此奴は。

「強請る気か」

「ああん？」

「わ、私を強請る気なのか。そ、そうなんだろう。いったい幾値吹っ掛ける気だ。き、貴様、ど、どうして私を」

何で私だけ。

私ばかり。

こんな思いをしなければならぬのだ。

「あんた、オカシいんじゃないかね？」

「お、オカシいかよ。真面目に働いててダサイかよッ
やっぱオカシいわとケンジは言った。

「俺ら、グセえとかあんまり言わねえし。何でそんなにパツつんパツつんな訳。俺、金とか全然興味ねえって言ったじゃん。聞いてなかったんすか。人の話聞かねえとかって、あんたらよく怒るじゃないすか。聞いてて欲しいすよ」

「じゃあ」

「じゃあ何だ。何なんだ。

「目的は何だッ」

「だーかーらー」

アサミのこと知りたいだけだつて——と、ケンジは投げ遣りに言った。

「何度言えば解ってくれるんすか。耳ないんすか」

「何だとッ」

何だと何だと何だと。

「そ、その言い方は何だッ。貴様何様だッ」

何様でもねえすよとケンジは平板に言った。

「肩書きも学歴もねえ馬鹿だつて、俺は。大体そんな怒ることないじゃないすか。そつちこそ何なんすか」

「何だつて——」

「俺、最初っから、一つも嘘言つてねえし。隠しごともしてねえし。あんたの不利になるようなことしてねえし。つてか、寧ろあんたのために働いてると思うし。データ消したりしたんだから、話ぐらい聞かせてくれたつていいと思うし」

間違つてんなら言つてくれていいすよとケンジは言う。

「ほら、俺頭悪いから。微妙なこととか理解しねえし。気分悪いすか」

悪い。最悪だ。最悪なのだが。

「だからつて怒ることないと思う訳すよ。あんた、いい思いして隠してた訳すしよ？アサミと散散ヤツて、それでアサミ死んじまつて、丁度いいと思つてたんすか？ だからつて、その態度はどうなんすか。俺がそのこと知つてたからつて、怒鳴ることないじゃないすか」

間違いですかとケンジは問うた。

間違つちやいないよと答えた。

「そんな、好きだとか可愛いとか、一緒にいてえとかいいだけメールに書いて、ガキみてえに並んで写メとか撮つてて、死んでショックだもねえと思つたんすよ。氣い悪くしたなら謝りますけど」

「いや——」

謝ることは、多分ない。

「真実に」

裏はないんだなと言つた。

「裏とか表とか、そういうのがある程、学ねえす。策略とか得意じゃねえってか。いい加減解って欲しいんすけど。俺、猿並つすから」

「信用していいのか」

さあ、とケンジは両手を広げた。

「俺には何とも」

誰かの差し金ということは。

——ないか。

こんな手の込んだことをして貶めなければならぬ程、私は恵まれたポジションに居る訳ではない。私は蔑まれこそすれ、羨まれるような立場にはない。寧ろ逆だろう。私をこういう目に遭わせ、辱めて嘲笑うような連中なら——。

私は周囲に視線を飛ばした。

客は少ない。

隣接したブースはすべて空いている。かなり離れた処に中年の女性が二人、入り口付近に高校生風の若者が三人居るだけだ。窓の外は——。

ただ暗い。

広い硝子には、私が映っている。

ただの冴えない中年男だ。しかも死人のような表情で、冷や汗まで浮かべている。救いようがない。

とても——滑稽だった。

硝子に映ったケンジは、直接観るケンジと変わりが無い。

不遜で、不愉快で、どうでも好い。

——いや。

どうでも好くはない。

此奴は、もうどうでも好い男ではない。

私は視線をケンジに向けた。反つくり返って、虚ろな眼で卓上のソーダを眺めている。

「あ——」

声を発した瞬間、右背後からコーヒーのお代わりはいかがですかという耳障りな声が聞こえた。不味いコーヒーはまだ三分の一くらい残っているじゃないか。それなのに注ぎ足す気なのか。それにしてもこの間の悪さは何なんだ。

私は肩越しに一度ウエイトレスを睨み付け、その無表情な白い顔に貼り付いたパーツを一通り眺めてから、結局お願いしますと言った。

不味い、熱い、黒い液体が注がれた。

「遊びのつもりじゃなかったんだよ」

制服の女が遠くの中年女性の方に行くのを待って、私はそう言った。

「遊びとか遊びじゃねえとか、どう違うんすか」

「いや——まあそれは」

「ヤルのは一緒すよね。ギャラ払うとか——すか」

それじゃあ売春じゃないかと、私は小声で言う。

「いや、遊びじゃねえなら仕事なのかなって。ほら、何かヤッて金貰うホストみてえなバイトとかあるじゃないすか」

「わ、私が貰うという話か。ば、馬鹿なことを言うんじゃないよ。そうじゃなくて——その、気持ちの問題だよ」

「気持ち——って？」

「だから。まあ、ある程度本気だったと」

「ある程度って、解んねーす」

「まあ、その、だから、これは不倫のようなものだろ？」

「ようなもの、なんすか」

「そうじゃない。不倫だ。」

「俺、そのフリンってよく解んないんすよ。浮気とか二股ふたまたと違うんすか？」

「え？」

「不倫は——。」

「まあ、そうだな。浮気というのは、ちゃんと伴侶はんりよが居るにも拘かからず、それで別の異性と遊ぶ——まあ性的交渉に限らず交際する、というような場合だろう。二股ふたまたというのは、同時に二人の異性と交際するようなケースだよな」

「フリンは？」

「不倫は——人の倫みちに外れたというような意味か」

「外れてるんだ。それで本気とかある訳すか。本気で外すってことなんすか？」

「いや——」

鬼畜きちくってことですかとケンジは言った。

「鬼畜きちくって、どういうことだね」

「だって、本気こいて人のミチ外したら、そういうの鬼畜きちくって言うんじゃないんすか？」

「そんな」

そんなじゃない。私は亜佐美が好きだった。

愛してたと言った。

ケンジはほほ初めて笑った。いや、嘲笑ちやうしたのか。失笑しつしたのかもしれない。

「そういうことも言うんだ」

「ほ、他に言いようがない」

「つてか、ただの浮気うきっしょ？ ヤマザキさん奥さん居るじゃないすか。そういうの伴侶はんりよ、つうんでしょ。で、他の女とヤツちやつたんだから、浮気うきっすよね。俺思うけど、他に言い方ないんじゃないすか」

浮気か。

そういう言葉で表わしたくない。

本気だったんだよと私は繰り返した。

「亜佐美が好きだったんだ。私が独身ひとりだったなら」

結婚を申し込んでいたか。

ふうん、とケンジは鼻を鳴らす。

「じゃあ、そういう時って、ヤマザキさんにとつては奥さんの方が浮気の相手つてことになる訳つすかね？」

「何だつて？」

「だつて、本命がアサミなんだとすつと、そうなるンじゃないすか」

「何を言ってるんだ。妻は——」

妻だよ。

「は？ 別に、お宅の家庭の事情とか、難しいこと知りたい訳じゃねえけど、まあ、正直解ンねえ」

「解らない——か」

意外にその辺は常識的なのだろうか。妻帯者が妻以外の女性と肉体関係を持つということとは良くないことだと、この男は考えているのだろうか。

——此奴がか？

そんな道徳的な思考をするのか。

それはつまり、私自身、自分が道徳的でないと認識している、ということなのだが。

「不道徳だと思うか」

「道徳とか知らねえけど、何つうか、奥さん——キラいなんすか？」

嫌いというか」

嫌いじゃないか。

すつかり醒めてるじゃないか。

「中学生や高校生じゃないんだ。好きだ嫌いだで済ませられる話じゃないだろうよ。夫婦というのは、その」

「好きで結婚したんじゃないかねえの？」

「勿論そうだが」

妻は、私を、もう。

「何、奥さんも浮気でもしてる訳？ そんな、当てつけとかでアサミとデキたとか、そういう話すか？」

「的外れなことを言うなよ。妻は浮気なんかしないよ」

それなら。そうだったなら、ずつと気が楽だ。

妻に——非はない。

ないつたらない。

まるでない。あつたつて、ない。

あの女は常に正しい。

たとえ間違つていたつて正しい。家の中では常に正しい。

何を言つても通る。通つてしまうのだ。私の家の中だけでは。

異を唱えれば糾弾され、間違いを指摘すればただ疎ましがられる。

同じ意見を述べたつて、私の言うことは間違つていると言われる。ニュアンスが違うだけで、そうじゃないわよと言われる。機嫌を取つて調子を合わせていたつて、結局は私が責められることになる。

違うわよ違うわよ。
そうじゃないわよ。

何言ってるの？

何言ってるのだと？ 話をしているんだよ普通に。私はいつたい何なんだよ。子供の前で。私にだって威厳というものはあるんだ。間違ったことなど何も言っていないのに、何言ってるのだと？ 馬鹿じゃないのだと？ だから駄目なのよだと？ 何も解ってないわねだと？

自分の機嫌だけで何もかも判断するのか。

子供が居ない時は家事もしないで寝てばかりいるくせに。

私は泣き乍ら働いているんだ。

お父さんは家のことなんか何も知らないものねえ。理解もないし興味もないんでしょ、どうせ——。

どうせって、何だよ。

精一杯考えてるし、時間だつてやり繰りしているよ。私だつて子供と遊びたかつたし、子供の面倒だつてみたかつたし、子供のことを懸命に考えて、意見だつて言っているじゃないか。でも身体は一つしかないんだよ。

私の人生なんかどうでも好い訳ね。

まったく理解する気がないのね。

人を何だと思ってるのかしら。

うるさいよ。何で疲れて帰ってからお前の趣味の話をニコニコ聞かなくちゃならないんだよ。理解があるから習いごとでも何でもさせてやつてるんじゃないか。月謝だつて馬鹿にならないだろうよ。お前が好き勝手するために、私は働いているのじゃないか。

そういうお前はどうかんだよ。

私の仕事の話を聞いてくれたことがあるか。結婚して十八年、ただの一度だつてそつちから仕事のこと尋いてきたことはないだろうよ。話したつて上の空じゃないか。何も覚えてないだろう。出張だつて、何日も前から何度も何度も言っているのに、前日になつて今更言われたつて準備なんか出来ないとか吐かすなよ。で、何処行くのじゃないだろうよ。

ワイシャツだつて下着だつて、旅先で買って済ませてるんじゃないかよ。文句言つたつて疲れるだけだから、我慢してるんじゃないかよ。いい気になりやがつて。

私がどんな仕事してるかすら知らないだろお前。

それでも、私は——。

妻は悪くないよと言つた。

「私が——悪いんだ。きつと」

へええ、とケンジはまた小馬鹿にしたように言う。

「ホントに解んねえ。奥さん悪くなくて、でもつてアサミには本気で、で、不倫で、浮気じゃねえつて、まるで理解出来ねえ。俺、そこまで頭悪いかね」

「いや——妻と上手く行つてないことは事実だよ。丁度息子の進学のことだね、まあ、揉めてだな」

「息子さん、高校つすか」

「ああ。来年受験なんだがね。私は、まあ息子の好きにさせようと言った。他意はないよ。高校生ならある程度将来のことも考えているだろうし、希望やなんかもあるだろ。頭ごなしに親が指図することもないだろうと思つた。いや、今だつてそう思つてるさ。まあ、何でもかんでも好きにしると思つてる訳じゃない。どうでも好いと思つていた訳でもない。先ず本人の意志ありきだろうと、まあそうしたつもりでそう言つたんだがな」

冗談じゃないわよ。

無責任にも程があるわよ。

あの子の内申知つてて言つてるの。

「間違つていたんだよ」

「何がすか？」

「さあ。言い方が悪かつた程度のことなんだろうさ。そんなに酷いこと言つたつもりはなかつたんだが、拗れてね。大喧嘩だよ。それで、それから口を利いてくれなくなつてな」

「奥さん口利かねえの？」

「顔も見えてくれないよ」

「飯とか作らないんすか？ 專業すよね？」

「食事の支度はするさ。息子が居るから。まあ、私はこれから家に帰つて——冷めた余り物を一人で食べるんだよ」

「もう寝てるんすか？」

「寝てないよ。女房も息子も起きてるよ。テレビ見てるのかゲームしてるのか、インターネットでもやつてるのか知らないよ。何をしてるのか尋くことも出来ない。おかえりなきいでもなければ、いつてらつしやいでもないのさ」

私が何をしたというのだ。

どうして——。

「それでも怒らねえんだ、ヤマザキさん」

「怒つた——こともあつたよ。でも、怒つたつてどうにもならないんだよ。怒るだけ疲れよ」

おい。

いつたい。

誰のお蔭で暮らしていられると思つているんだ——。

絶対に口にするまいと思つていた言葉を、私は言つた。

どんなことがあつてもそれだけは言うまいと、私は心に決めていた。これ程陳腐で、しかも無意味な自己主張はないだろうと、そう思つていた。

慥かに金を稼いでくれるのは私だ。

しかし、私の生活は家族が支えてくれている。專業主婦の仕事を賃金に換算すれば、それは自ずと知れることである。

誰かのお蔭——ではない。

暮らしは本来、暮らしている者全員の行為で成り立っているのである。

私は働いて妻を、家族を喰わせているというつもりは毛頭ない。最初からない。夫婦は同等なのだと、私は当たり前のように考えていた。家庭は夫婦二人で、そして家族全員で作るものなのだと、そう思ってた。生きていたのだ。

なのに。

私は、言ってしまった。

最低、と言われた。

慥かに、最低最悪の結果になった。

私は怒鳴られ、叫ばれ、コーヒーを掛けられた。いつも私を無視する息子までが、オヤジ思いがつてるよと言った。

偉そうなこと言ってるんじゃないよ。

たかが三流企業の間管理職だろ。

ナニ威張ってるんだよ。うぜえよ。

家がガタガタすつからさ。

帰って来んなよ。

「喧嘩しに帰って来るなら勉強の邪魔だから帰って来るなと言われたよ。まあ邪魔なんだよ。無視されて、冷遇されて拗ねて威張って嫌われて——まるで馬鹿だろ」

親が揉めんの誰だかって嫌すよとケンジは言った。

「まあそうだろうさ。でもな、私の家の場合、私が軽んじられて——いや、嫌われてるだけなんだよ」

私は再び硝子窓を見た。

卑小な、薄汚い中年が、背中を丸めてそこに居た。

みつともないと思った。ケンジが、気に入らない生意気な若造が、何故だか堂堂として見えた。

「じゃあ、何だ。その」

奥さんさせてくれねえ訳だと、ケンジは酷く下卑たことを言った。

私は一瞬妻の顔を思い浮かべる。そして妻の肢体を思い浮かべる。

随分、遠い記憶だ。

「品が——ないな君は」

「そんなもんだねーつすよ」

「まあ、いいよ。気取ったって仕様がなから。所謂セックスレス状態は、もう何年も前からだからね。今に始まったことじゃないさ。ずっとご無沙汰だ」

「そんなもんですか」

「他の家庭はどうか知らないよ。でも長く添って気が合わなくなるとな、難しいもんだよ。擦れ違うというか何というか——君なんかに話すことじゃないけどな」

そう。

こんな見ず知らずの小僧に話すことじゃない。

「それでアサミに欲情したんすか」

「そうじゃない」

「違うんだ」

「違うよ。そんなんじゃない。

「あのな、人間は性欲だけで生きてる訳じゃないだろう。二言目には浮気は甲斐性とか好色じゃない人間は居ないんだとか、そんな風に言う恥知らずな奴も多いが、誰でもそうだと思うたら大間違いだ。私は違う」

「違うんだ」

「断じて違う。何度も言うが、私は」

「本気——すか？」

「ああ。そうだよ本気だった」

「アサミもそうだった訳すか」

「え？」

「亜佐美は。」

「そ——そうだったんだらう」

「何で解るんすか」

「いや、だって」

「最初に誘ったのは亜佐美の方だ。」

「彼女も——」

「そこつすよ。例えば、アサミが男を騙くらかす性悪女だとか、そういうこと考えたことないんすか」

「ないよ。だって考えてもみたまえ。私は別に金持ちでも何でも無いぞ。風采の上がらない、ただの汚らしい中年男なんだ。誑し込んだって騙したって、何の得もないだろう。私は交際こそしていたが、彼女に貢いだことはないよ。ラーメンおごったくらいだよ」

「関係ねえと思うんですけどケンジは言った。」

「関係ないって、何だよ」

「だから、あんた、たつた今、人間は性欲だけで生きてる訳じゃねえって言ったじゃないすか。俺もそう思いますよ。でも、人間金欲しいって奴ばかりでもねえつすよ。物欲だつて同じじゃないすか？」

「いや——そうだけれども」

「アサミ、面白がつてただだけかもしれねえすよね？」

「面白がる？ 私を——擲つてたと？」

「擲うつてか。そういう関係が面白えつうか」

「そんな」

「そんな女じゃなかった。」

「亜佐美も真剣だったんだよ」

「ふうん。じゃあ、何で離婚とかしなかったんすか？ そんな嫌げな奥さんと別れて、本気のアサミと結婚でもすりゃ良かったじゃん」

「そう簡単に行くか」

「簡単じゃねえのくらい解るつて。馬鹿でも」

こんな小僧に何が解るんだ。
解るつてとケンジは繰り返した。

「慰謝料だの裁判だの親権だの、面倒臭めんどうくさえこと山程あんでしょ？ 細こまけー決めごととか嫌きらなるじゃん。それに、メンツとか体面とか色色ある訳つしよ、大人にはさ。ま、俺もガキつて齢としじゃねーすけど、それだつて想像ぐれえ出来つから。俺の親も離婚したからその辺の感じは能よく解る訳。簡単なもんじゃねーよね」

「じゃあ」

「じゃあ、じゃねえすよ。慥たじかに面倒かもしれないけどもさ。でも、本気だ本気だ言うならさ、そういう話ぐれえ出ねえ？」

「そういうつて——離婚か？」

「いや、あんたから切り出さねーでもさ、相手からとか出るもんじゃねーの。アサミの方だつてそんな真剣だとか言うんならさ、奥さんと離婚してくれくらい言つて来るもんじゃねえ？」

「亜佐美は——」

身の程を弁えた女だつたんだよと言つた。ケンジはいきなり、自分の膝頭ひざがしらをパンと叩いた。

「それ何？」

「何つて——そういう、控ひかえ目なというか」

「ザけんなよとケンジは言つた。

「それこそあなたの都合のいい解釈なんじゃねえの？ 控ひかえ目なら愛人でいいのか。これであんたがアサミのことを阿婆おば擦ずれだと思つてたとか、疑つてたとか、そういう話なら納得出来るつて。騙あされてるかもしれないねえと思つてたんなら、いくら奥さんキライでも離婚したりしねえよな。それなのに、あんた本気だとか愛してるとか、そういうこと言うじゃん。ショックだとかで済ませようとしてたくせに、何が愛してるとか、」

「しよ、ショックだろうが。それに、初対面はつたいめんでだな」

「俺が秘密知つてると判るまではバックレてたじゃん。バックレるにしても、バックレようつてのがあるじゃん」

「な、何だよ」

「また何だよ、か。あんたさ、関係ねえとか知らねえとか言い乍ならさ、アサミが死んだのはショックだつたつて言つたんだぜ。初対面はつたいめんの俺に」

「だから何だ」

「普通さ、派遣で三箇月通つてた女、下の名前で呼ぶか？ カシマさんが亡くなられたのはショックでしたね——かなんか言われたら、俺だつてああそうか、隠してえんだと思うよ。それがさ、アサミが死んだのはショックだつた、だぜ」

あんたの持ち物かアサミはとケンジは言つた。

「ペット死んだみてえな言い方じゃん。最近じゃペットだつて死ねば泣き叫ぶ奴が大勢居るぜ。そんな、本気だ本気だとか言うなら葬式くらい来いや。来れなくなつて、もつと動揺ぶゆとかするんじゃないか？」

「ど、動揺はしたよ。悲しんだよ」

「ホントかよ」

「お——」

お前なんかは何が解ると、私は怒鳴った。

店内に声が響いた。中年女性がこつちを視ている。学生が振り向いた。

構う——ものか。

「私だって泣きたかったよ。仕事放り出して亜佐美のどこに行きたかったよ。でも、どうしようもないだろう。どうしろって言うんだよ」

「何でどうしようもねえの？」

「そりゃあ——だって」

何故。

何故どうしようもないのだろう。

「あんたさ、最初っからどうする気もねえんだろ？ たとえば離婚して、アサミと結婚するとか、これっぽっちも考えてなかったろ」

「そんなことは」

ない。

考えた。

考えたが——。

考えはしたのだが。

「都合よく奥さん死んでくれねえかなーとか、精神そんなもんじゃねえの？ 事故とかでポックリ逝ってくれたら、楽に済むなとか、その程度の夢みてえなこと考えてただけじゃねえの？ 妄想だよ。それって、本気のうちか？」

そう。

そう思ったこともある。何度もある。

「あのな、あんたの話聞いたって、アサミのことなんか何にも判らねえよ。毎日毎日顔合わせて、何度も寝ててよ、それなのにあんた、アサミのこと、何も知らねーんじゃねえのか。本気で愛してたとか気味悪いことばっかほざくけどさ、それって全部あんたのことじゃん」

ケンジは顎で私を示した。

「アサミが何考えてたのか、どんな想いで過ごしてたのか、何したかったのか、あんたの話からはまるで判んねえ。ただ、あんたと寝たってことしか判んねえ。まるでダッチワイフじゃん、アサミ。これなら、寝た時の具合がどうだったとか身体がどうだったとか、どうすりゃ喜ぶとか、どんな声出したとか、そういうエロ話された方がまだいいって。その方が判るって」

ケンジは身体からだを起こした。

「で、何。お前なんかは何が解る——だ？ だから、何にも解らないんだって。あんたが、会社で馬鹿にされて、家で馬鹿にされて、辛辛いえ悲しい行くところえってうだうだウジウジしてることしか——解らねえよ」

こんな。

こんな奴まで。

こんな奴まで私を馬鹿にするのか。

働きもしないで。学びもしないで。努力もしないで。

「わ、私が何をしたというんだ。私はな、私は、間違ったことはしていない。私のどこが悪いというんだ。私はお前みたいな奴にコケにされる覚えはない。お前なんかになんかと言われる筋合いはないんだ。お前みたいな——」

お前みたいな。

「肩書きも学歴もねえから？ 礼儀知らねえから？ 敬語使わねえから？ じゃあ肩書き上の連中になら、馬鹿にされる筋合いはある訳だ？ 学歴のある奴になら、コケにされてもいい訳だ？」

「そ——」

そんなことはない。

上司どもは全部無能だ。愚か者だ。部下はみんな役立たずだ。学歴が高かったって、あんな連中はみんなカスだ。

「なら、何でそんな卑屈なんだよあんた？」

「ひ、卑屈だと？」

「卑屈じゃん。あんた、何も悪いことしてねえ訳だろ」

「してないさ」

私は悪くない。

間違つてもいない。

褒められても貶される覚えはない。

感謝されても詰られる覚えはない。何も無い。

「なら、あんたの周りが悪い訳か？」

「そうだ。その通りだ。何もかも——」

「ならさ、辞めちゃえばいいじゃん。そんなクソみたいな会社。別れちゃえばいいじゃん。そんなクソみたいな嫁。何でそうしない訳？ 「面倒臭え訳？」

「だから——」

だから何だ？ だから、だから。

「だから、世の中というのは——そう簡単なものじゃないんだよ。難しいんだよ。色々あるんだよ。そんな、正論だからといって罷り通ると思つたら大間違いなんだ」

「俺、別に正論とか言つてねえよ。あんたの方が偉くて賢いんだから、あんたが言うのが正論なんじゃねえの？」

「わ」

私が言っているのは。

「お、お前みたい人間に解るかよ。私の苦勞が。嫌でも辞められないんだよ。辛くても別れられないんだよ。辛くて辛くてやつてられないけど、もう限界だけど、それでも止められないんだ馬鹿野郎」

「何で？」

「だから、お前なんかには解らないって言ってるだろうが」

「ならさ」

——死ねばいいのに。

ケンジはそう言った。

「死ね——って」

「そうだろ。あのさ、そんなに何もかも辛^{ツレ}え悲しい嫌だ堪らねえで、それでもどうしようもねえっていうんならさ。ホントにどうしようもねーんなら、生きてる意味なんかねーんじゃないかね？」

「それは——」

だから死ねば、とケンジは言った。

「あんた死にたくはねえの？」

「死にたくは——」

ない。多分。

「何で死にたくねえ訳？ 生きてたって辛いだけで、でもってどうしようもねーなら、死なね？」

「そ、そんな簡単に死ぬとか思うか」

「あんたさ、ヤマザキさんさ、あんたの言い分も、まあ解^ワねえじゃねーけどよ、それでも、どうしようもねえことなんかねえよ。世の中にさ、どうもならねーことなんかねーもんよ。会社辞めねえのは、あんたが辞めたくねえからだし、離婚しねえのはしたくねえからだよ。絶対そうだって」

「な、何でだ。何で解る」

「馬鹿でも解るって。あんた、何だかんだ言^ハって部長なんだろが。認められてるじゃん」

「み、認められてなんかいない。」

「もつと上に行きてえからそう思うんだろ？ つまり——もつともつと認めて貰^カいてえから、もつと高く評価されてえのにされねえから辛いんじゃないかねの？ 奥さんにだつて好かれないと思うから、だからこそ冷たくされて悲しくなってるんじゃないかねの？ そうじゃねえの？」

「それは——」

「あのさ、例えば今日帰^カって、おかえりなさいお疲れ様でしたつて言われたらどうよ。今までご免なさいつて謝^マられたら瞬間赦^{ゆる}すだろあんた。まあ、それでもネチネチ今までの恨みごと言うかもしんねえけど、要はあんたが優位に立ちてえつてだけじゃん。会社だつて明日出社して、昇進したら嬉しいんだろ？ 速攻で機嫌直らね？ ちやほやされれば何もかも収まるだろ。そのちやほやが欲しいから辞めねえし別れねえんだよ。それ以外にな
いじゃん」

どんな辛くたってよ。

「どんな辛くたって悲しくたって、飯喰えば美味い、女抱けば気持ちいい、そう思うから生きてる訳じゃねえの？　そういうのが絶対ねえって、もう何にもねえって、そう思ったらどうな訳？」

「そんな、享樂的なことだけでだけ生きる訳じゃ」

「ねえかもしんない。でも、そんなこと言うなら、あんたは辛いとも思わねえ筈だぜ。あんたが辛がつてるのはみんな、そういう享樂的なところの話じゃねえの？」

「え？」

「あのさ、俺思うんだけど、あんたの言うマイナスって、ただプラスがねえってことじゃんか。それ、マイナスじゃねえよ。人生でもなんでも、普通はゼロだって。プラスもねえしマイナスもねえのが普通じゃん。あつたて結局はプラマイゼロだから。良いことがねえから不幸だって、それ、おかしくね？」

悪いことなんかねーじゃんよとケンジは言った。

「認められなくたって褒められなくたって、やるべきやいけねーこときちんとやれてりやそれで構わねえ筈じゃね？　他人の言葉なんか気にならねーだろ。奥さんだつてそうじゃん。どんな扱い受けてたつて、一応喰い扶持稼いで、それよりちよつと多く稼いで、子供学校やつて、どこがいけねえの？　冷たくされたり、ヤラせて貰えねえから拗ねてるだけじゃねえかよ」

アサミはな、とケンジは言った。

「あなたの欲求の捌け口になつただけじゃねえのか。本気だとか愛してるとか言つて、自分を誤魔化してるんじゃないよ。どの口が言ってるんだよ。あんた、思い通りにならねえ欲求不満をアサミの股ぐらに注いでただけじゃねえか。カッつけてんじゃねえよ。本気だつたとか、そんなことつらつと言うなら後追い自殺でも何でもしろよ。しねえじゃねえかよ。死人に口なし、浮気がバレなくて良かった良かったつてそう思つてると正直に言えよな。どうなんだよ」

「私は——」

死んだ方がいいのかな。

知らねーよとケンジは言った。

「死にたくねえなら生きてりやいいじゃん」

「ああ」

「少なくともあんた俺より賢くて偉くて金持ちなんだから恵まれてンじゃね」

そう言つて、ケンジは立ち上がった。

待つてくれと私は止める。

「あ。亜佐美は、私のことをどう思つていたのだろう」

「だから。俺は」

アサミのことよく知らねえつて言つたじゃんよとケンジは素っ気なく言つて、卓上から伝票を攫み取つた。

「あんたこそ、何度も寝てて解らなかつたのか？」

そうなんだ。

解つてなかったんだよ。

「ああ。解らなかつた。亜佐美のことも、女房のことも、息子のことも部下のことも上司のことも、私は何も解つちやいないんだ」

他人のことなんか解らなくて当たり前だろうがよとケンジは言った。

「自分のことだつて解らねえだろ。解つたフリすんなつてこと。俺、馬鹿だから、だからせめて死人のことくらいは知りてえと思つてるんだけど、中中解るもんじゃねえつて」

腰を浮かせた私を制し、此処俺払うからこれくらい金あるしと言つた後、ケンジは。

「それから、俺さ、ケンジじゃねえの。健也けんやな」

そう言つて、去つた。

私と、硝子に映つた山崎が残つた。